

祝。京絃三〇〇号

祝。京絃三〇〇号 (拜受順 敬称略)

京都 馬場 鴨水

みよしのの たかねの桜散りにけり 風も白き春のあけぼの (新古今集) 京洛の桜も散りばて若葉青葉のかげが色濃くなりました。「京絃」ともに歩み、新しい智識のムードにひたりながら琵琶の練磨へ。」と、創刊二十周年にお祝い申してから、早くも五年になります。

このたび第三〇〇号発刊を迎えられましたことは誠に目出度い限りです。主幹植村先生におかれては、色々な感懐を心に抱いておられるでしょう。私はその当初より縁深く、なつかしさが心の奥底からよみがえり、過ぎ来し琵琶界を無心に踏みわけていく自分の姿を感じます。

明治から大正にかけて活躍された先輩諸兄の多くは、今は亡き人となって居られますが、今も美しい曲が聞こえて来ます。また七十・八十の老年を迎えて、静かに余生を送って居られる人もたくさんあります。この方々は私たち以上に琵琶をなつかしみ、名曲の数々を口ずさんでおられることでしょう。

絃友植村先生、いつも美声と名調子で聴衆をわき立たせ、かつ青春に燃えて、日々「京絃」の編集に全霊を捧げて居られます。「寿命増長」と申しましょるか。

東京 生 重 定

草庵 私語 植打のあるものは必ず興り、植打のないものは自然にすたれる。然し植打のある琵琶が今日衰えんとして居るのは何故か、琵琶界七不思議の一つである。誰かこの興亡の定理を明確に実証してくれる琵琶人はいないか。琵琶隆盛時代の舞台裏で老人達は如何に努力して来たか、私達は原点に帰って今それ等のことを考え直してみるときはなかるるか、新しい時代の琵琶は如何にあるべきか、それは今までによく論議されて来た命題であり、今はそれをこつこつと実践に移して行く段階に入っている時だと思ふ。

新しい詩形の作歌は生まれようとして居り、そして新筆な研究も進められようとしている。心のふる里、琵琶とは何か、切々たる魂の絶唱、それを待つこと既に久しい、琵琶は興るべくして興り、衰えるべくして衰える。

考古学的遺産は千年を経た今日猶掘りおこすことが出来る、然しあのまぼろしの伝説的名曲はまだ発掘されてはいない。琵琶は一度地中に埋れて了つたら永遠にその魂を掘りおこすことは出来ない。薄陽江の芦荻の上を流れたあの哀調は、今誰もそれを聴くことは出来ない、ただ見るその夜の月は、今もなお江心を白く照らしているだけである。

秋田 星 野 巖 水

「現代琵琶人大鑑」発行の功績に感謝しての思い出。これは昭和三十六年十一月に京絃社から発行されましたが、植村先生はこの編集のため各地の琵琶人たちと困難な連絡をとり、自ら全国を廻って目的を達成された熱情には深く敬服いたします。

昭和三十六年十月一日、秋田駅前永森旅館にて故熱海梧水師が中心となり、植村先生を迎えて六人で琵琶の一夜を過ごしたことを記憶して居ります。

大鑑「巻末」の琵琶変遷史は、琵琶人のため良い教本となり、私自身現在まで二十年近く机上に飾り、事あるごとに色々勉強させられます。その後昭和四十一年九月、秋田市に於て錦心祭全国大会が開催され、植村先生は

いつまでもお健かに古典琵琶芸道発展のためにお祈り下さい。一言お祝まで。

東京 生 重 定

永田錦心の地方演奏旅行の途次、車中の雑談をさけて窓ぎわに倚り、独り読書に耽っていたと云う話を聞いたが、琵琶全盛時代の寵児錦心が尚何を求めていたのであるうか、その悩みはもつと深い所にあり、孤独な人間心の姿を見るような気がした。

「京絃」は昔々その三百号を迎えんとして「京絃」の一言一句は将に一絃一声の絶唱であり、「京絃」の音律に和して大絃は嘈々として鳴り響く。

共に同志の一員としてここに敬意と祝意を表しつつ、更に冀水主幹の御健筆を祈る。

この六月を以て「京絃」が創刊三百号を迎えられ誠にお目出たく心より御祝い申し上げます。この間一回の欠刊も遅刊もなく実に三百ヶ月の長い年月をよくも実直正確に、しかも興味深く報道の任を果たして来られました。私も斯道に携わる者、ただ敬意を表し感謝の誠を捧げる次第であります。

浜松 小 野 鶴 彦

創刊三百号、今更ながら月日の過ぎた事が夢のようです。ずっと以前(十五年ほど前)神戸須磨祭での演奏会の時、植村主幹とご一語して京絃を知り、頂いてから今日まで長い年月、楽しく読ませて頂いております。その間数々の琵琶界のニュースなど報道して下さい喜んで居ります。

奥様御同伴で来秋下さいました。このような御縁で、私の娘が京都同志社大学に入りました際、不案内な土地での道案内など色々御厄介になりました。そして四十四年娘は先生の著書に頼り、琵琶をテーマとした卒業論文をまとめ卒業いたしました。

相生 浜 本 旭 好

①琵琶界の昔を知っていられた大先輩植村先生が、永い経験に基いて編集されること。②発行日が変わらず毎月一日には必ず手許に到着している。③記事内容が琵琶人に新しい史実を知らせて呉れる。④各地の演奏会やラヂオ放送などの報道、予告。⑤「あとがき」を読む楽しみ。

私が琵琶をはじめたのは隆盛時代の大正十一年ころで、夢よ今一度の感を深くしています。どうか、より一層内容の良い記事を送って私達を励まして下さい。三〇〇号、心よりお祝詞を申し上げます。

東京 岡 部 錦 蝶

斯界に無くてはならない存在として、いつまでも発展し続けていきますよう、主幹植村氏のいつそあの御精進と御手腕に期待申し上げます。拙文ですがお祝の言葉といたします。

植村先生、「京絃」発刊三百号を心からお祝い申し上げます。さて、私は九十才になりますが、これと云って琵琶界に貢献したことは何もございません。だのに何処へ行っても諸先生に大事に扱って頂き、感謝の日々を送っております。

また、毎月送って頂く「京絃」を読むことを楽しみにしております。近頃は目も耳もだいぶん心もとなくなつて来ましたけれど「京絃」を読むときと、琵琶を弾奏するときとは、不思議に目も耳もすっかりいたします。

昔から盲で有名な方、聾で有名な方など、たくさんおられました。私は名人でも、達人でもありません。ただ琵琶を神とも尊び、仏とも敬って、毎日感謝しながら琵琶を弾奏しているのです。これからは諸先生に護られ、益々元気に琵琶を弾奏させて頂き、また「京絃」を何日まで読ませて頂き、長生きしようと思っております。

植村先生、「京絃」発刊三百号を心からお祝い申し上げます。

植村先生もどうぞ私に負けずに頑張つて「京絃」を続刊され、琵琶界の道しるべとなるよう希望し、拙文ながらお祝の言葉といたします。

今や時世は文化というものを顧る尊重する時代となりました。されば文化という観点に立っての琵琶芸術、即ちわれわれは進んでこの文化向上に役捧げなくてはならないのではないかと思ひます。

私や時世は文化というものを顧る尊重する時代となりました。されば文化という観点に立っての琵琶芸術、即ちわれわれは進んでこの文化向上に役捧げなくてはならないのではないかと思ひます。それにつけても、御紙が一層の成長を遂げ

東京 押田 旭 竊

琵琶機関紙「京絃」がこのたび三百号を迎えられ誠に目出度い事と存じます。

歳月の流れは寸秒と刻んで見ると存外短かく感じられますが、その間には他の芸能とちがって、いろいろの御苦労があったことと推察致します。それにもめげず三百号という長い歴史をつくられたことは、琵琶界の機関紙として拍手を送りたく存じます。何卒これを機会に、今後益々斯界発展のため御尽力下されることを祈念してお祝の言葉と致します。

東京 仲川 秀 邦

京絃創刊三百号誠にお目出度うございます。第一号よりのおつき合ひ、長いようでもあり又、もうそんなになつたのかと、いろいろの事が思い出されます。発刊当時は戦後の混沌期で用紙も自由になりませんでした。随分ご苦労なされた事もお聞きして居りました。ご立派にご成長なされたのは植村主幹のご健康とご努力の賜ものと存じます。これからも益々お元気で発行をお続け下されたく、お心の中をお察し申し上げ只々お喜び申し上げます。

箱根 押川 旭 葉

「京絃」創刊三百号お目出とう存じます。数少ない琵琶機関紙として多くの方々に愛読されて三ヶ月、並々ならぬ御努力のためものと編集にあられた植村先生始め諸先生がた、只々敬服の外ありません。何かと京都の

先生方にお世話を頂いている私にとりまして、今後益々有意義な芸術論戦の展開を「京絃」に期待申し上げて、一地方の琵琶機関紙に終らせたく無く日本の「京絃」として頂きたく心からの御発展を祈り上げます。

大阪 小川 吟 水

京絃紙の発刊歴史が三百号を重ねられ驚きと同時に御同慶に堪えません。四半世紀の長きにわたって、社界状況の変動にもめげず編集、執筆の御苦労に徹されましたことは敬服の外ございません。

御紙は琵琶人にとって大切な文学的、歴史的な理解力を深める上に貴重な役割りを果たして下さりました。今後共私ども後進にとつて変らぬ指針であつて下さいますよう、主幹植村先生の益々御健勝を祈り上げます。

高崎 針谷 錦 古

「京絃」創刊三百号を迎えられ、琵琶界発展と文化向上にたゆまざる御健闘を続け斯界の羅針盤として御活躍誠に感謝感激のほかありません。心から御祝福申し上げます。

よく石の上にも三年と云われますが、四半世紀二十五年の長期に亘りその間一回の遅刊欠刊もなく発行を続けられた不撓不屈の精神たるや主幹植村先生の闘魂はほんとうに敬服のほかありません。どうか今後とも更に躍進を続けられ五百号六百号、否、続く限り斯道高揚琵琶界の為め継続下さることを希念申

京都 平井 春 嶺

昭和五十四年六月号を以て「京絃」発刊三百号を数える。一口に三百号と簡単に云うが、月刊だから二十五年を経たことになる。それも発刊以来一回の遅刊も欠刊もないのだから誠に恐れ入ったことである。

その間いろいろと毀譽褒貶が有っただろうが、それには聊かも耳を籍さず、唯一筋に我が道を行くとの信念に因るものだろうが、白面貴公子然たる容貌、瘦癯鶴の如き身体、米寿に近い年齢で、ひとたび弾奏をされれば、十七才の乙女の心を融かさねばおかぬ美声の持ち主の、どこにそんな強いものが有るのだろうか。これは単に不倒不屈の精神力で通じた結果と云うより、何よりも琵琶を愛し、何よりも琵琶を尊敬している、その心の顕われに因るものではなからうか、と私は思う。

植村さん、これからも充分健康に留意され、われわれの琵琶道精進の指針となるよう「京絃」をいつまでも続けて下さることを祈念し、意を尽くせない文章にて失礼ながら、創刊三百号の祝詞とさせていただきます。

「京絃」創刊三百号を迎え、先づ衷心よりお目出度うとお慶び申し上げます。

浦和 花 俣 圭 水

「京絃」創刊三百号を迎え、先づ衷心よりお目出度うとお慶び申し上げます。すでに傘寿を超えた真水先生が「京絃」にかけたその情熱は、琵琶界に昔つてない大き

な足跡を残されました。又去る昭和三十六年秋には「現代琵琶人大鑑」発行という大事業を達成され、その巻末の琵琶変遷史、年譜等、今日も尚得難き参考書として愛読致して居ります。大鑑に掲載されている全国各先生方の御写真、経歴等を拝見するたび、故人となられた方の意外に多いのに驚き、且つ残念に思われます。

真水先生とは二十年程前東京にて開催された錦心祭全国大会の際初めてお目にかかり、以来御厚情を頂き、又昨年五月入浴の節一水会京都支部長馬場水先生の胆入りで京都琵琶協会の平井会長様初め各先生方が不肖圭水の歓迎会を催して頂き、その節真水先生と二十数年ぶりのなつかしい御対面をする事が出来たが、相変らず饗樂として御活躍の御様子に接し、誠に心強く嬉しく存じ上げました。

どうか今後共「京絃」が不偏不党の琵琶界の指針として、より一層の御発展と、更に真水先生が宝寿を重ねられ、益々お元気に御活躍をなされんことを衷心より祈念して一言御慶びの言葉といたします。

大阪 秋元 旭 晨

貴紙創刊二十五周年を心よりお祝い申し上げます。一口に二十五年と申しましたが、その過ぎし足どりを振り返って見られたら色々な事があつたと拝察いたします。「創業は易く守勢は難し」と申しますが、二十五年間一つの仕事を続けたことは並大抵のことでは

はなかつたと、そのご努力に深く敬意を表します。

戦後日本の社界は経済成長の名のもとに急速に変貌し、物質文明の高度成長は喜ぶべきことながら、一方、精神文化のよき面は日に失われ、人々の心の荒廃は救うべくもありません。道義はすたれ人間関係はたても横も薄れ、心ある人は常に憂いて居るところであります。

かかる折から貴紙は、視野を広げ片寄らず、名を求めて利に走らず、斯界の道しるべとして二十五年、不断のご精進を重ねられ、新風を吹きこんで下さいました。何卒今後ともその内容がマンネリ化におち入らないよう着眼され、われわれを啓発して下さいますよう希望します。

編集にあたられます植村先生はじめ寄稿なさる先生方に深く敬意を表し「京絃」の発展と斯界の指導的役割を果たして下さいよう祈って止みません。

宮城県 吉田 清 幸

「京絃」は二十五年間一回の欠刊もなく続けられたとのこと、植村先生の琵琶に対する情熱と信念、只々頭の下がる思いで、のんびりと読まして貰つておる自分が申訳ないと感じます。いかに原稿と、書くことのむづかしさ、それにも増して整理、発行するという仕事は並大抵ではないと痛感しました。どうかお身体にくれぐれも御留意下され、末永く京

絃をお続け頂きますよう祈り上げます。

静岡 赤心流 鶴 翁

三百号達成を心よりお祝い申し上げますと同時に、これからは植村先生の御長命と御元気を考えます時、植村先生が京絃の三〇〇号発行を、一ヶ月も休まず完成された事に如何に御苦心なされたかを、身を以てお察し出来ませと同時に心より敬服致します。

又、御掲載になった数々の名文及び各地の催しの御報道が、如何に全国琵琶人の教養知識芸術を深め向上発奮させたか、私も不才ですが其の影響を受けた者一人として、心より深謝せずには居られません。

どうか益々御発展なされて、より大きく高い成果をあげられますようお祈り申し上げます。お祝の言葉とさせていただきます。

西宮 三浦 蓮 水

「京絃」が三百号になったと聞いて、そんなになつたのかと驚いて居ります。一口に三百号と云つても長い年月いろいろとあつたでしょうが、一回の遅刊欠刊もなく発行を続けられたのは確固たる信念がなくては出来ない

ことで、琵琶界に大きく貢献された「京絃」に深く敬意を表します。植村真水さんは既に八十才を越えられたというのに、頗るお元気で、美声を保って琵琶を弾奏されるのに驚きます。五月二十七日には京都で三百号記念演奏会を京絃社の御主催で開催されます由、どうぞ益々お健やか「京絃」を続けて下さいますようお願い致します。

神戸 柴田 旭 堂

早いもので、昭和二十九年でしたか私の会は。あの当時筑前だけでなく薩摩の方々ともよく懇談したり共に舞台をしたりしていたので、錦心流の植村先生の壮筆を双手をあげて喜んだのでした。私の旭堂会誌は三〇号で終りました。世の中でよく云う三〇号で終りです。それに引きくらべよくも三百号まで頑張られましたね。毎号何か教養を兼ねた記事で尊敬しています。何卒植村先生、私達の為にお元気で、永く続けて楽しいものにして下さいませ。心より三百号を祝し上げます。

東京 藤 卷 旭 鴻

京絃が六月号で三百号を迎えられ本当に心から感動いたします。大分長期間続けておられたことは承知しておりますが、三百号となりますと二十五年、四半世紀の間休みなく発行し続けて来られた植村先生のご苦労はさぞかし大変なものだったろうとお察しいたします。琵琶界が京絃のお蔭でどの位復興の機

運を高めたか計り知れないものがあります。然も毎号研究資料を必ず掲載していただき、我々演奏家としては申すまでもなく座右の書として将来共是非続けて頂きたいと熱望して止みません。どうぞ先生にはお身体をご大切に下さいまして、斯界のため最後までご指導下さいませようお願いして、私のお祝いのことばといたします。

京都 矢 吹 旭 美津

京絃創刊二十五周年お目出度うございます。一口に二十五年と申しましたが、数えてみればオギャーと生まれた赤子が二十五才に立派に成長するだけの年月となり、本当に驚きでございます。その間の御努力は筆舌には語りつくせないと思っております。毎月楽しく拝見させて頂き心より感謝いたします。今後とも益々御健康で京絃発行をお続け下さいませよう、一言お祝の言葉とさせていただきます。

京都 荒 木 旭 媛

疎水べりの柳は色濃く水に映り、近く平安神宮では五月の風さわやかに観光客たちの胸をも張らせている今日このごろです。このたび三〇〇号を迎えられた「京絃」主幹植村先生、まことにお目出度うございます。先生はいつも美しい声で錦心流の名曲をお聞かせ下さい、御示範さえ頂いてあります。どうぞお元気で琵琶発展のため、楽しい京絃記事をお送り下さいませ。この上も。

祝。京絃創刊三〇〇号

琵琶芸術協会
秋声会東京本部

前 田 秋 声

〒141 東京都品川区西五反田四一八一十二
電話 (〇三) 四九一一八三三二番

祝。京絃創刊三百号

錦心流琵琶秋声会名古屋本部

阿 部 秋 子

〒454 名古屋市中川区中島新町
中川住宅 五一四〇一
電話 (〇五二) 三五三一〇二八四番

一言お祝詞に代えさせていただきます。

京都 山 岡 旭 清

「京絃」創刊三百号を寿ぎ謹んでお慶び申し上げます。昭和二十九年に第一号を発行なさいましたから四半世紀、二十五年の長い間たゆまぬ御努力が実って、琵琶機関紙として立派に斯界のために貢献下さいました。心からお祝い申し上げます。どうぞ今後ますます御発展を祈り上げて御祝詞といたします。

東京 水 藤 五 郎

京絃三百号おめでとうございます。ただ三百号と云いますが、これは大変な偉業であります。月に一号ですから満二十五年の三百回の発行という、或る読者にすれば「ああそうか」と感じるだけかも知れませんが、三百号の京絃と比較すると、全く微々たる程度ではあります。編集、発行の経験を持つ私にとっては至難の偉業をなされたと思つて、本当の話です。二十五年間一度も休刊無しで発行と聞いて、主幹植村真水先生の不断の情熱をそこに感じました。琵琶への、そして琵琶界への情熱の深さは、この三百号発行によって凛然として明らかにされたと思つて、二十五年前の私は未だ小学生でしたから、京絃の存在を知る由もありませんでしたが、いま亡母錦樓の書棚にある当時のそれを見て、少し変色した紙面に月日の流れを感じながら、三百号の祝文を書く自分のことを思って、暫

し感傷に陥ってしまった私です。

私も数回に亘り拙文を載せさせて頂いた経験があります。植村主幹より「更に続けて下さい」とのお言葉を頂きながら、京絃紙面を毎号変化に富んだものにしたらと云う私の信条を申し上げて今日迄控えて来ましたが、同じ筆名が続き過ぎるのを恐れたからでしたが、それは一般読者の感想でもありません。私も読者の一人として、今後更に京絃の発展を望んでいるのですが、それには、八頁二十四段の貴重な紙面を読み応えのある内容で埋めることではないかと思つています。とかく歴史冊子ではと思ひ違える程に史談記事でかたまつてしまつてありますが、矢張り琵琶の冊子、つまり芸冊子なので、芸の香りのする紙面であつて欲しいと思つています。勿論演奏会、琵琶人の動きのみに終始してはならないのですが、芸の香りの記事を読者に送ることが必要でしょう。そのためは、拙いながら私も協力させて頂きたいと思つています。

祝。京絃創刊三百号

薩摩琵琶高昇流家元

泉勝院 峰 口 高 昇

〒604 京都市中京区高倉通丸太町下ル
阪本町
電話 (〇七五) 二一一一〇八九番

機関紙京絃の由来と縁起

京絃紙の目的、使命、功績などについては、植村先生の誌説などで、風格ある性格、行動など創刊百号を迎えられたとき、諸先輩方の祝詞記にくわしく描写されて余すところがないので、ここでは京絃発刊の経緯について自分の記憶を記することにします。

これも自分が大阪府庁から府税に転勤したばかりの時のことで、余りハッキリとは記憶していないが、たしか昭和の末期、先生が「現代琵琶大鑑」を発刊したいから協力してほしいと云って、府税事務所へ来られた。

そのころ綱谷一才氏が「今昔琵琶の友」という琵琶紙を発行して居られたが、収支償わず廃刊することになった。

当時薩摩、筑前の琵琶人達は、親睦のため、一つはこんな機関紙が欲しいとの要望も強かったが、骨折りで利益にならぬ仕事を引受ける奇特な人など居なかつたのを、犠牲的に植村真水先生が引受けられ、紙名を「京絃」として昭和二十九年に発刊されるに至った。

読者にも限界があり、また発行部数にも限度のある琵琶機関紙を四半世紀、三百ヶ月の長きに亘って続けられたのは大変な事であつたらうと、今更ながら頭の下がる思いである。

三百号を迎えられた京絃に心から御祝詞を申し上げ、四半世紀の歴史と伝統を有する本紙に対し、今後益々発展されんことを切に祈り上げます。

東京 松 本 諸 水

いくとせも書き続けたる京絃のびわのともし火今に輝く
永い年月、発行の御苦労の程お察し申し上げます。慾得では出来ないお仕事で、ペーヂの少ない割には参考になる記事が豊富です。またその間、現代琵琶人大鑑の御発行は、今思えば記念すべき足跡でございました。

横須賀 普 門 義 則

貴京絃は六月号を以て創刊三百号を迎えられ心からお祝申し上げます。

私が京絃を愛読するようになったのは、大先輩足立芦光師が植村主幹のお人柄をたたえた熱心なおすすめによるもので、昭和三十四五年頃からであります。

琵琶機関紙の愛読者層は主として琵琶人だけであり、地域的に関係ある限られたものである。その継続発行の苦労は並大抵でなく、経済的には企業としては成り立たないもので、植村主幹の只々愛読精神の表われであると拝察して居ります。その内容も琵琶人の常識を高めるものが多く、人物評も公正で片寄らないことに敬意を表して居ります。

愛読者も創刊時は地域的に京都大阪を中心とする関西琵琶人が主力であつたと思ひますが、東海、関東から除々に北陸、東北、北海道、山陽、山陰、四国、九州と愛読者数が拡がっているようにうかがわれますが、これも継続発行の努力の賜ものであると確信いたします。

ます。琵琶人各位は愛読精神を以て流派を超越して、今回の創刊三百号を記念して公正なる機関紙京絃を盛り立てて愛読し、全国琵琶人の意志の流通を図り、大同団結して琵琶界の復興に更に継続努力されんことを切望いたします。

植村主幹には御高齢ながら仕者を凌ぐお元氣ですが、一層御自愛專一に琵琶界の為尚も御貢献下さらんことをお願いいたし、一愛読者としてお祝の言葉に代えたいと存じます。

東京 輝 立 枝

御紙「京絃」は創刊三百号を迎えられ心からおよろこび申し上げます。これも偏見に植村先生の変わらぬ信念に加えてお人柄、そして恵まれた御健康の賜ものと、重ねてお祝とおよろこびを申し上げます。御自愛切に祈り上げます。

松山 白 石 旭 優

すがすがしい若葉の季節と共に京絃三百号の発刊を見るに至りました事は誠に目出度く衷心よりお祝申し上げます。

中央より遠隔の地、四国にある私共にとりましては、京絃は琵琶界の動勢を察知する指針ともなっています。毎月京絃の到着を心待ち致している次第でございます。

三百号と一口に申しましても二十五年間を休みなく続けられた偉業の蔭には人知れぬ御苦心が織り込まれていることでしょう。主幹

祝。京絃創刊三〇〇号

最上 穂 洲

031 青森県八戸市内丸十一
電話(二二)八七七五番

古 桂 幽 遠

稿 幽 遠

奉祝。京絃創刊三百号無欠長寿
祈念。真水先生益々御健筆御清祥

吟道 東州流

宗家 平 田 東 州
(光 山 堂 水)

〒530 自宅 泉野市佐野台二〇一六三
電話(〇七二四)〇六二一〇三五七
東州流 大阪市北区神山町一―二六
本部 高桑東扇方
番話(〇六三六一)一五七九〇

とも京絃をお続け下さらん事を希い、御祝詞申し上げます。

東京 若 水 桜 松

京絃が六月号を以て三〇〇号を迎えられるとのこと、紙主植村真水先生の並々ならぬ御努力の結晶と、今更ながら感を深くさせられます。京絃紙の性格は常に公平無私で、決して特定の人のためには筆を走らせず、むしろ地味の中に機関紙としての使命を貫いているのが特色と云えるのではないのでしょうか。現在の琵琶界に於ての貴紙は、斯かる点で得難い貴重存在です。今後益々御発展を祈念して祝詞といたします。

大阪 塩 谷 旭 洲

京絃ノなんというユニークなひびきであらうか、みやびやかな感じでもある。

琵琶界の指針であり、琵琶人が知識をひろめ、全日本琵琶界の活動状態を知る大きな、そして貴重な役割を果たして来た機関紙であると、常日頃この存在に感激しつつ毎号愛読させて頂いている者であります。

元来機関紙というものは、発刊が華々しいが次第に尻すぼみになるものが多い、良い原稿が集まらないのが主たる原因と思われるが、わが京絃の場合はその心配はなく、実に立派な文章に読みごたえのある内容で毎回紙面がうづまっている。これだけの原稿が集まるのは、主幹の人格と手腕の然らしむるところと

感じ入る次第です。機関紙の刊行はいろいろの面で非常にむづかしいものである。この報いのない奉仕の難事を発刊以来一回の休みもなく、三百ヶ月という実に長い間続けられた、その御努力と御苦労に対し衷心より感謝申し上げ、今後益の御発展と主幹植村先生の御健勝を祈り、創刊三百号のお慶びの言葉といたします。

高柳 吉 井 良 三

「京絃」三百号が目出とうございます。月刊紙の発行という事は他人には窺い得ない苦労がありまして、創刊二、三ヶ月で消え去る泡沫紙の多い昨今、三百号も続ける御努力は並大抵ではなかったと存じます。私も印刷、出版業務に携わる一人として、それがどのよう大変な仕事であるかということが充分よくわかります。どうかこの上とも貴紙の発展向上を希念し、良き紙面をお見せ下さいませよう御願ひ申し上げます。

二十有五年は永し波瀾越え

青年となりし京絃祝す

締め切りて夜を徹し事幾度ぞ

京絃三百号上梓に思ふ

絃の音と俱に歩みし京絃の

戦後史綴りて二十有五星霜

仙台 阿部 万二

日本唯一の琵琶機関紙「京絃」創刊三百号を迎えられ心からなるお祝を申し上げます。

主幹植村真水先生をはじめ、これに御協力下さった全国各流派の先生方、紙友の皆様御尽力の賜もので、常に琵琶界に生気と励ましをお与え下さった御功績を讃え上げます。私は明治三十年生れの八十二才になります。少年の頃永田錦心先生の「石重丸」に心魅せられ、以来琵琶趣味に生きぬいて各流派の先生方の教えを受けて来ましたが、どなたも年老いて他界され途方に暮れた私は毎月の京絃を最高の師と仰いで読ませて頂き、有難いきびしい自己反省の教えとして、その実行につとめて居る者でございます。

「京絃」の内容については、全琵琶界に於ける各流派第一流の先生方の、琵琶芸術に関する御意見や貴い御体験、歌曲の解明、新作の紹介等を広く取材掲載され、又各地催し物の報道や予告、ラヂオ・テレビによる琵琶放送など、居ながらに親しい交わりを結ぶことが出来、琵琶を弾き歌いながらこのままの生活の中の奥底に流れる永遠の生命、即ち我等の命のもとである宏大無量の恩恵に包まれます。これら毎日を楽しみ嬉しく過ごさせて頂いて頂きます。これも皆御紙によって御縁を結ばれ、琵琶道に御精進の各先生方の御教えのお蔭と感謝いたしております。

終りに紙友皆様の御健康と琵琶芸術の振興並びに「京絃」今後一層の御発展を念願してお祝いの言葉とさせていただきます。

日本芸術琵琶協会 四月例会

四月十五日(日)昼一時東京文京区大塚六丁目入後園川中島。伊与田詩水、月下の陣、庄司伊水、滝口入道、山崎錦幽、敦盛、杉山旗水、彰義隊、青木早水、城山、内田隆章、高松城、高田栄水。以上研修の後小宴、六時半散会した。

錦心流琵琶演奏会

四月十五日(日)昼一時名古屋市中区YWC A三階ホール、主催絃声会。本能寺、前田綱水、湖水乗切、吉見白水、別れの盃、小林残水、五条橋、長谷川秋楓、西郷隆盛、丹野純水、白虎隊、静岡岡田住秋水、大江山、大阪中野淀水、井伊大老、豊橋森田紅水、木村重成、水谷浩水、茨木、大阪小川吟水、舟弁慶、静岡岡太田杯水、敦盛、会長安江弘水。

山田洲鳳琵琶吟道五十七年

四月二十一日(土)二時一六時東京新宿文化センター、主催山田洲鳳氏。会主の詩吟荒城月夜曲、琵琶康頼悲願、絃彈奏、鈴木流泉、短篇本能寺、立花青真の外詩吟詩舞、劍舞、書道吟等七十四題。

春季琵琶演奏大会

四月二十二日(日)正午松山市民会館小ホール、主催愛媛琵琶連盟、後援愛媛県教育委員会外。君が代、會員、石重丸、大西、城山、大木。

詩吟、黒木、湖水渡、森本旭、衣川、井沢、旭悠、小栗栖、原田悠、茨木、齊藤、吉野、野落、酒井旭、湊川、和田旭、西郷隆盛、遠藤旭、能州行、村上旭、源実朝、公西、森旭、生、新撰組、佐藤、舟弁慶、白石、旭優、茨木、立花、宵水、堅田、石塚、旭奏、敦盛、栗田、水、坂本、馬、谷口、旭英、都落、井久、旭好、隅田川、佐竹、都、琵琶、劍舞、白虎隊、白石、浅田、尺八、劍士、二、三高地、来賓東京藤巻旭鴻。

錦心流琵琶演奏会

四月二十二日(日)正午豊橋市白山会館、主催一水会豊橋支部、後援東京本部外。城山、青木、桜狩、田中、西郷隆盛、木下、新撰組、小川、壇の浦、斎竹、楠正成、山本、水、茨木、小林、典水、五条橋、石黒、石水、川中島、吉見、輝水、屋島の誓、菅沼、水、鉢の木、神藤、水、母常盤、静岡村磯樓水、山岡、鉄舟、水谷、浩水、竹生島、浜松、小野、鶴彦、恩響の彼方、大阪、小川、吟水、井伊、大老、田中、篁水、地震、加藤、東京、鉛谷、六水、木村、重成、支部、長田、中、訴、水。

伏見醍醐寺観桜祭に琵琶献奏

四月二十二日(日)昼三時から豊太閤ゆかりの同寺で大阪琵琶同好会協賛による左記が献奏された。桜合奏、別所、鈴木、青柳、本能寺、田中、歌水、那須、与一、ぼまれ、石橋、旭、陸丸、卷田、旭、大石、良、酒井、旭、水、谷、旭、丸、矢野、旭、城山、島津、旭、都、三高地、辻、旭、城、鴨川、露、中島、旭、穂、坂、崎、出、羽、守、天津、八、千、代。外に詩吟、扇、舞、尺八、歌、謡、曲、など、数、番。

神武館道場発表会に琵琶演奏

五月三日(日)夕六時東京新宿安田生命ホール、

四月二十九日(日)屋神戸文化大ホール。吟詠、劍舞、詩舞の首記は千八百人の超満員で全五十二題の内二十八人合奏の「本能寺の変」と十四人合奏の「琵琶舞大阪落城」に蓮水会長三浦蓮水女史が琵琶出演して万雷の拍手を受けた。

明治神宮に琵琶献奏

四月二十九日(日)十一時半明治神宮社殿に於て普門義則氏が「川中島」を奉納された。

京都琵琶協会のための賞味会

四月二十九日(日)向日市の梅原旭濤女史の招きにより山城名物たけのこ賞味会が催された。先づ昼一時過ぎから馬場鴨水、楊嶽水、山岡旭清、安住旭康、水内澁水、平井春嶺夫妻、植村真水各会員が順次参集して夕刻まで演奏や談話など楽しく過ごし梅原女史心尽くしの筍料理に舌鼓を打ちながらビールで乾杯、なごやかな春の半日を送った。

久米寺春季大法要に琵琶献奏

五月三日(日)昼一時久米寺特設舞台で大阪琵琶同好会の奉納演奏会が開催され琵琶の外色々の邦楽などで参拝者を喜ばせた。(次号詳報)

竹下翠風演奏会

五月三日(日)夕六時東京新宿安田生命ホール、

主催みどり琵琶本部、後援竹下翠風後援会。(三千円)。秋風故郷山、青木、石井、良、深雪、吾妻、江雪、三経、江風、坂本、馬、勸進帳、会主竹下翠風、綱館、添野、真外、五、夜、討、曾、我、吾、妻、江、風、舟、弁、慶、尺、八、田、中、外、に、吟、詠、七、朗、詠、四、短、歌、舞、踊、一、尺、八、田、中、栄、童。

京都琵琶協会五月例会

五月三日(日)昼一時本部平井会長宅。本月十日須磨保養センターにて一泊例会を開催予定であった都合により之を八月に延期して本日開催となったもので出席者馬場鴨水、戸倉旭嶺、梅原旭濤、矢吹旭美津、山岡旭清、植村真水、以上各会員がなごやかに談笑或いは研修演奏など楽しい晩春の一日を過ごした。附近の料亭錦鶴に向いて戸倉旭嶺氏の輪旋に寄り乾盃小宴、八時散会した。

第二回琵琶染名流会

五月六日(日)十時半大阪難波高島屋ホール、主催日本琵琶染協会関西支部(千円)。彰義隊、四日市山本嶺舟、柳の精、京都梅田旭波、会津白虎隊、東大阪山崎蘭水、安宅の関、京都福西旭紅、淀君、大阪川上登水、羅生門、大阪島田旭千、細川ガラシャ夫人、八尾島津大嶺、橋中佐、大阪高千穂旭楓、菊水の旗、神戸吉山、水、殿、島、の、戦、大、阪、菅、旭、香、小、栗、栖、城、陽、木、下、皇、水、吉、野、落、大、阪、伊、勢、谷、安、江、新、撰、組、京、都、中、島、旭、穂、川、中、島、京、都、牧、南、水、玉、藻、の、前、明、石、富、樫、旭、桂、桜、狩、京、都、馬、場、鴨、水、坂、崎、出、羽、守、向、日、梅、原、旭、濤、楊、貴、妃、西、宮、楊、嶽、水、お、蝶、夫、人、大、阪、尾、山、山、瑞、常、城、山、京、都、平、井、春、嶺、那、須、与、一、大、阪、横、野、旭、鳳、奇、縁、大、阪、岡、部、錦、蝶、鴨、川、の、露、彦。